

題名 「人の心のあたたかさに触れる」

氏名 東藤 汐音

皆さんは、「介護の仕事」と聞くと、どんなイメージを持ちますか。おそらく、お年寄りを相手にした、体力的にも、精神的にもきつい仕事だというイメージをもっている人が多いのではないのでしょうか。たしかに介護は大変な仕事かもしれないかもしれません。しかし、大変な仕事であると同時に、人の心に触れられるあたたかい仕事でもあると思います。

私の母は介護士です。早番や夜勤などもあり、毎日いそがしそうです。そんな母の姿を見て私は、「仕事、大変じゃない。」とたずねてみました。すると母は、「たしかに大変な仕事やね。でも、その分やりがいのある仕事でもあるんやよ。」と言い、私に介護の仕事の魅力を二つ教えてくれました。

一つ目の魅力は、多くのお年寄りと関われることです。お年寄りには人生経験が豊富なので、時間や仕事に追われ、少々心が荒んでしまっている

若い世代の人達に比べて、心に余裕があり、とてもおだやかな人が多いです。だから、どんなに小さな親切にも、「ありがとう。」と声をかけてくれます。介護の仕事をする事で、そんな人のあたたかさに触れることができます。

二つ目の魅力は、人として成長することができることです。お年寄りには、人生の大先輩でもあるので、人として学ぶべき所がたくさんあります。そんな方たちの体験や考え方をたくさん聞くことができるので、とても良い刺激を受けることもできます。

私は、毎日忙しそうなお母の姿を見ていたせいもあって、介護の仕事にあまり良いイメージはありませんでした。しかし、母の話を聞いて、介護の仕事はたくさん人たちと良いつながりをもつことができる、とてもやりがいのある仕事だと思えるようになりました。

近年AI化が進み、仕事がだんだんと減ってきています。そして最近介護ロボットというものも導入されつつあるそうです。しかし、私は、介護ロボットの導入には反対です。介護の仕事の一番

の魅力は、人と人とがたくさんのつながりを持ち、お互いのあたたかい心に触れられる所だと思っています。しかし、ロボットを導入することで、人とのつながりは薄れ、あたたかい心に触れられる機会も減ってしまうのではないのでしょうか。そうならないためにも、より多くの人に介護の魅力について知ってもらい、「将来、介護士になりたい。」と思ってくれる人達を増やしていきたいと思えます。そのために私は、介護の仕事の魅力ややりがいを伝えていきたいと思いました。より多くの人に介護の仕事の魅力や、やりがいを知ってもらうことで、将来、介護士という仕事があることになり、介護という仕事を支える人材が、たくさん生まれてほしいと思いました。

題名 「働く」とは？」

氏名 高田 美鶴

みなさんは、何のために「働く」のだと思いますか？私は、お金を稼ぐため、生活するためだと思っています。職業体験に行くまでは。

私は、夏休みに職業体験で老人ホームのデイサービスセンターに行きました。私は、人見知りです。初めて会った人と話すのがとても苦手です。だから、心の中には不安しかありませんでした。正直、楽しみだとは思えなかったです。でも、働くうえで初めて会った人と話す機会は多いと思うので、今の自分ではダメだと思い、新たなことに挑戦する気持ちで老人ホームの職業体験を希望しました。

いざ、職業体験が始まると、やはり簡単な仕事ではないとすぐに分かりました。なぜなら、行ってすぐに朝礼があり、利用者さん一人一人の体調や利用者のご家族から依頼されていることなど細かい内容を専門用語を使って職員全員で共有していたからです。私は全く聞きとれません

でした。それだけ、利用者さん一人一人を大切にしていることが分かりました。その後、私は利用者さんとまちがいがしゲームをしました。どのような話しかければよいのか、まちがいがしゲームをどうやって説明すればよいのか、初めてのことで戸惑いました。でも、職員の方々が休む間もなく働いているのを見て、私もモタモタしていられないなと思い、思い切って話しかけました。「こんにちは」と笑顔で言うのと、私に負けないくらいの笑顔で返してくれました。私はその時、初めて来て良かったと思いました。話していて思ったことは、何回同じことを言えばいいんだということとです。話しているときは、少しイライラしてしまいましたが、よく考えると、仕方のないことだと思いました。私が介護される立場になったとき、覚えていないだけで怒られるのは嫌なので、相手の気持ちを考えて行動しようと思いました。職員の方が利用者さんと話しているのを見ると、さすがプロだと思う場面がたくさんありました。笑顔にさせるのが上手なので、どうしてなのか考えてみると、自分がまず笑顔になることが大切

だと分かりました。だから、私も誰と話すにしても笑顔を絶やささないように心がけたいです。そして、職員の方の様子から、もう一つ思ったことがあります。それは協力して物事をやりとげていることです。職員の方より利用者さんの方が圧倒的に数が多い中、困っている利用者さんがいないのには驚きました。

私は、職業体験を通して「働く」ことに対する考え方が変わりました。お金を稼ぐことは大切なことだけれど、それ以上に、人の役に立つため、自分の成長のために働くことが大切なのではないかということでした。

職業体験で、考え方の幅を広げることができ、たくさんのことを学ぶことができました。私は、学んだことを今後の学校生活や自分の将来に生かしていきたいです。

題名「祖母から学んだこと」

氏名 中 啓亮

僕には認知症になった祖母がいます。その祖母は、ひどい幻覚や幻聴などの症状が出ていました。誰もいない部屋なのに、「誰かいる。」と騒いだり、生きている人にむかって「あの人は死んでいる。」などと言ったりしました。また、家を何度か脱け出したことがあり、両親は医師に祖母を診てもらい、専門の施設への入所を決めました。

正直に言うとは僕は、そんな祖母に恐怖を感じていました。だから、積極的に話しかけたり関わったりせず、どちらかと言うと避けていました。たまに会いに行っても、祖母は僕を誰かと勘違いしたり、ボーツとしたりして僕にとって祖母のお見舞いは楽しいものではありませんでした。

そんな頃、学校で認知症講座という授業がありました。そこで話してくれた人の言葉を僕は今でもよく覚えています。

「その人達は、異常なわけではありません。困ったことに対して正確な対応が出来ないだけなので

す。」という言葉です。この言葉を聞いて祖母に
対しての考え方が変わりました。もしかしたら、
祖母は不安なだけなのではないか、本当は誰か
に頼りたいのではないだろうか、と。そこから僕
は祖母に対しての反応を変えました。どんな話
でも聞く、幻覚、幻聴を最初から否定しない、
などです。この反応を変えたことで、祖母は変わ
ったように感じました。会った時には、笑顔で話
してくれるようになりました。僕は、祖母との
心の距離が縮まったように感じました。

また、その施設の職員の方達も、とても優しく
接してくださっていたことも大きいと思います。
どんなお年寄りにも優しく声をかけ、遊びなど
に誘うことで心をリラックスさせていました。あ
の時、祖母を家から出すことに申し訳ないよう
に思いましたが、逆にここに入ったことで祖母は
良くなったのだと感謝しました。なぜなら、僕が
「何かしたいことはあるの。」と聞いたときに、「し
たいことはないよ。一緒にいる人達のしたいことや
話を聞くのは楽しいよ。」という答えが返ってき
たからです。僕は、ここで何かしらの絆が生まれ

たのかな、と思いました。認知症の人達も心もあれば、個人としての考えもあるでしょう、それを忘れてはならないと思いました。

祖母は良くなってきたので、八月中には家に帰って来るそうです。その先の経過はわかりませんが、完全に治ってほしいです。最近会ったときは、ほとんど治っているように見えました。家での生活は、設備の整った施設より祖母にとっては大変な部分もあるかもしれませんが、でも、祖母が帰ってきたら、たくさんふれあって、心の距離をさらに縮めようと思っています。もう以前のようには怖がったり、避けたりしません。大切な僕の家族である祖母。その祖母を大切にしていきたいです。

題名 「高齢者の気持ちを考える」

氏名 石野 亜桜

私は小学校四年の時、校外学習で学校近くの高齢者介護サービスセンターを訪問した。その時のことを思い出すと、車いすでも入浴可能な風呂や、施設を利用する高齢者の方々の習字や絵などの作品が廊下に飾られていたことなどが頭に浮かんでくるが、一番印象に残っていることは、高齢者や職員の方々が皆、笑顔で楽しそうにしていたことだ。職員の方々は常に笑顔で高齢者の方々に接していた。そして高齢者の方々も楽しそうに職員の方々と話していた。私達も高齢者の方々と話をし、トランプや将棋などをして遊んだ。時間を忘れるほど楽しかった。介護と言うと暗いイメージがあったのだが、実際は全く違うことを知った。訪問前、「知らない人と話しても楽しくない」と思っていた自分を恥じながら私は学校に戻った。

私はその後、新聞を読むようになった。介護の記事や介護をしている方々の投書などを読むと、

四年前に私が学んだことはほんの一部でしか
なかったことを知った。介護の現場は人手も施設
も足りないこと、仕事は肉体的にとっても辛いこと、
給料が安いこと、高齢化社会が進み、施設を利
用したくてもできない人が大勢いること、「施設
は子供みたいなお遊びしかしないから行くのが嫌
だ」「大勢の人と過ごすのは苦手だから行きたく
ない」と望んでいないのに家庭の事情で渋々施設
を利用してしている高齢者がいることなど、負の部分
が多くあることを知った。四年前、笑顔で接して
下さった高齢者や職員の方々も辛い思いを抱え
ていたのかもしれない。

そんなことは全く想像もせず、私達は施設を
訪問した。私達は、「私達の訪問で、少しは高齢
者の皆さんに楽しんでもらえたかな」と高齢者
の方々には何かをしてあげたつもりになっていた。
だが実際は逆で、高齢者や職員の方々も精神・
身体面、業務などで大変な中、私達に楽しく学
んでもらえるように気遣って下さっていたのだ。
今なら分かる。当時はまだその気遣いや皆さん
が抱えているかもしれない苦悩などに思いを巡ら

すことはできなかつた。

私には祖父母が父方母方合わせて四人いる。私とは別居しているが、幸い皆、元気だ。だが、いずれ介護が必要な時が来ると覚悟はしている。祖父母は皆、何かあったら施設に入れてくれれば良いと言っているが、それは本心で言っているのだろうか？家族に迷惑を掛けたくないから氣遣ってそう言っているだけで、実際は違うのかもしれない。私は祖父母からとても可愛がってもらっている。その恩をきちんと返したい。もし介護が必要な時が来たら、その時の祖父母の本心をきちんと聞き出し、可能な限り尊重したい。お互いに後悔のないようにするにはどうすれば良いか、ニュースや新聞などを常にチェックし、変化する介護社会に目を向けながら考えていきたい。